

2018年度

SB

小論文

3月12日(月)
【後期日程】

人文社会科学部 (言語文化学科)

10:00～11:30

注意事項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(1枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は、2ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙(1枚(表裏))を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 問題は、声を出して読んではいけません。
- 6 配点は、比率(%)で表示してあります。

試験終了後

- 7 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの設問に答えなさい(配点100%)。

今はちよつとした死語ブームであるらしい。ウェブサイトにも死語辞典なるものが無数にあり、ためしにいくつか覗いてみると、いずれも一昔前の流行語辞典のようなものである。時代遅れの言葉の珍妙さが、かえって若い世代に受けているのだろう。「ナウいヤング」などは死語の代表格として、皮肉な脚光を浴びてしまっているかのようさえ思える。

いかにも流行語は死語辞典の最大の供給源に違いないが、もちろん他の言葉も死語になる可能性はある。いや、寿命の長短はともあれ、おそらく言葉はすべからず死を迎えることを宿命づけているのだ。ただ流行語以外の言葉は、なかなか往生際が悪い。言葉は、使われなくなっても、きれいなさっぱりとは消え去ってくれない。その多くはなお死語にはなりきれずに、中途半端にわだかまっている。辞書とは、見方によっては死語になりそこねたおびただしい言葉の束なのである。

仮に純然たる死語というものを想定するなら、それは誰の記憶にも残っていないような言葉、いかなる辞書にも収録されない言葉ということになる。しかしある言葉が時代の中から忽然として姿を消すというようなことは、現実にはまずありえない。もしありうるとしても、自明の理として例証することは不可能なのである。

だが私はふとこんな死語の光景を思い浮かべる。辞書に載っているのは、ほんのわずかな言葉にすぎない。そのささやかな辞書のまわりを、まさに亡霊のようにおびただしい数の死語が取り巻いているのだ。と。それは沈黙が支配する領域であり、入り込むことは許されない。だが私たちが駆使しうる、ほんのわずかな言葉、がリアリティーを持ちうるのは、それが今、ここにしかない存在、逆にいえばいずれかは消え去ることを宿命づけられているはかない存在だからではないか。辞書を矮小化する荒唐無稽な夢想といわれるかもしれないが、私たちにとつての言葉の重みとは、いずれ死すべき存在であるということを背景にしているように思われるのだ。

詩の場合を考えてみよう。詩の言葉はいかに特殊な用い方であっても、すべて辞書に収録されている言葉である。幸か不幸か、詩人は先に述べたような意味での純然たる死語を書くことはできない。だがマラルメの詩などにふと感じられるのは、それが無数の死語が浮遊する広大な沈黙の領域に支えられている、まさに氷山の一角のように、不可視の領域の頂だけが露頭しているという、いささか空恐ろしくもある言葉のありようである。ベケットの沈黙へと傾斜する気配を宿した言葉の不穏な鏡舌を、そこに思い合わせてもよいだろう。

いずれにしても、私たちが用いている言葉は、死語の可能性を秘めている。詩人たちは、今ある言葉がいずれ消え去るといふ、言葉が迎えるであろうもつとも根源的な事態を密かに見据えているのだ。そしてその見えない影を、詩の上に投げかけているのである。地口を弄するなら詩語とは死語の影なのだ。

そう考えるなら、矮小化された言葉の束である辞書とは、大いに危険な書物でもある。言葉の詩人の言葉は辞書にある。死語の影を辞書は帯びているのだ。いや、その危うい影は、詩語の問題だけにあるのではない。実のところ、辞書には収録されていながら、社会的、日常的には存在を許されない言葉というものがあるのだ。たとえば差別語である。タブーである言葉もまた、純然たる死を迎えることができずに辞書の言葉の群れの中に身を潜めているのである。

ある言葉がタブーであること。それこそが死語の影の最たるものではないかと私は思う。時に詩人は手垢てがのついた詩語に、死語の影を、タブーの感覚を添わせることによって、自らの時代の情景を成立させようとするのだ。

(建島哲「死語と詩語」『言語』二〇〇八年二月号)

(注) マラルメーフランスの詩人。 ベケット—アイルランド出身のフランスの劇作家。

問 筆者が「死語」をどのようにとらえているかを説明した上で、「死語」と詩や文学の関係について自分の考えを述べなさい(八〇〇字以内)。